

さあ俺はみた、

大車輪は木製だ、

その木製の^大車輪が、転がる路地は、

明らかな計画のもとに作られているんだろう、

歩きながらいつもそう思っていた、

路地を、

大車輪は転がって、

けつきよく、森と林の違いがわからないまま義務教育終わっちゃった、とわらった工場勤務の女の子とか、

どうやら、父が不幸せなのはあながち僕だけのせいでもないらしい、と気づいた受験期間近の男の子とか、

ふと、便りがなければ頼りもないという詩句を思いついてしかし、そのまま胸にしまい込んだ深夜レジ打ちのおっちゃんとか、

そろそろさすがにこの人生、なにかが巡ってもいいはずだ、いいはずだ、いいはずだ、と繰り返すひととか、それら

それらのひとびとの足跡を、路地を転がる大車輪が、彼らのひいた途切れそうな線と、計画された路地を、掠めるような線を、木製の^大車輪が、

踏み潰すところ、

塗り潰すところ、

無視するところを、俺はみた、

ベランダからみた、今宵みた、

ちよつと寒がりながら、みた、

踏み潰されてた、

きつとみた、

みたんだ

俺は